喜　界　島

朝潮満ちゃ上り（あさすみがちゃ）

唄：野島　スマ
相方ハヤシ・三味線：岩山　熊男

詞章１

＊２番歌詞のみ

あさしゅみちゃがりや
かにがまぬしゅどぅき　アイソーレ
かにがまぬしゅどぅき
（アイソーレ　かにがまぬしゅどぅき）
あすでむどらしや
にせめらびしゅどぅき　アイソーレ
にせめらびしゅどぅき

共通語訳

朝がたの海の潮が満ちるときは、蟹が出てくる潮時です。
遊びから帰るときは、青年男女が仲良くなる潮時です。

※「遊ぶ」というのは、奄美では多くが唄を歌って遊ぶことをいいます。

詞章２

しまやじゃぬしまむ　かわるじやねらぬ
みずにわかされて　くとばかわる

共通語訳

シマ（集落）はどこのシマも、変わることはありません。
ただ水が違うように、言葉が違います。

曲目解説

この唄の由来や系譜（ほかの唄とのかかわり）などについては、よく分かっていません。ただ、この打ち出しの歌詞はよく知られているので、奄美各地にあります。奄美にとって、海は生活と深く結びついていたので、このような潮（うしお）が歌われることは自然なことです。

この唄と、いくらかでもつながりを感じられる唄を他の島に尋ねてみると、先ず奄美大島に、かつて「潮満ちゃ上り節」という唄があったことが分かっています。歌詞は、「潮が満ちて海中の岩が、隠れたり見えたりする。だが、私を生んだ親は、もう私の目に見えなくなった。（亡くなった）」（共通語訳のみ）というもので、朝の潮とは限らず、また蟹も出て来ないのですが、昔は同じ唄だった可能性があります。（池野無風著『奄美島唄集成』参照）

また、徳之島の八月踊り系の踊り唄に「朝潮満ちゃ上り」という曲があります。これは、喜界島のこの歌詞とほとんど同じものが歌われます。なお、歌われ方の、特に歌詞の反復をみてみますと、これも一致していることが分かります。つまり、両方ともＡＢＣＤ４句からなる８８８８調の歌詞が、ＡＢＢＣＤＤのような繰り返しで歌われているのです（『南島歌謡大成Ｖ　奄美篇』参照）。唄の系譜を調べるには、歌詞反復やハヤシコトバの比較が大切であることを教えてくれます。

歌唱者

野島　スマ（のじま　すま）大正２年生まれ。喜界町島中出身。

朝花（あさばな）

唄・相方ハヤシ：榮田　久枝
唄・相方ハヤシ・三味線：岩崎　恵一
三味線：喜界町公民館講座民謡教室生

詞章１

＊２番以降歌詞のみ

ハレーイーハレー　あさばなぶしはやりぶし
(ヨイサ　ヨイサ　ヨイサヨイヨイ)
うたぬはじまり
ハレ　あさばなぶしはやりぶし

共通語訳

朝花はやり節です。唄の始まりは何と言っても、朝花はやり節です。

※「朝花節」を「はやり朝花」とか、「朝花はやり節」ともいいます。

詞章２

うがまんちゅむ　うがでどしりゅり
いぬちながむとりば　うがまんちゅむ　うがでどしりゅり

共通語訳

会ったことのない人も、会って初めて知り合いになれます。命を長く生きれば、会ったことのない人も、会って初めて知り合いになれます。

詞章３

まれまれなきゃうがで
なまなきゃうがむば　にゃいちごろうがむかい

共通語訳

久しぶりにあなた方にお会いできました。今お会いすれば、次はいつごろお会いできましょうか。

※「うがむ（拝む）」は人と会うこともいいます。

詞章４

うむかぎぐゎぬ　たたんちあんにゃ
てだぬうてまぐりにや　うむかぎぐゎぬたたんちあんにゃ

共通語訳

面影の立たないことがあるでしょうか。太陽が沈む頃、（愛しい人の）面影が立たないことがあるでしょうか。

詞章５

いもちゃんちゅうど　しんじつあらんみ
たしまいしはらふみきち　いもちゃんちゅど　しんじつあらんみ

共通語訳

いらっしゃったお方こそ、本当に真心がある証拠です。よ

そしまの石原を踏み越えて、いらっしゃったお方こそ、本当に真心がある証拠です。

※「よそしま」は「よその島」とも「よその集落」ともとれます。

曲目解説

喜界島でも「朝花」はいろいろな場で歌われます。所によっては、「朝花」を、新築祝いの唄、赤ちゃん祝いの唄、婚礼の祝い唄などとしている所もあります。

「朝花」という曲名については、諸説ありますが、朝咲く花のように若く、浅はかな娘さんを歌った文句が残っていますので、この歌詞から付いたと思われます。

現在、「朝花」と名のつく唄は、奄美大島、喜界島、徳之島で歌われていますが、島によって琉歌調といわれる８８８６調の歌詞と、音律が定まらない自由形の歌詞を歌うケースがあります。奄美大島ではほとんど自由形の歌詞のみが歌われますが、喜界島と徳之島では、両方の歌詞を歌います。

なお、奄美大島と喜界島には「長朝花」とか「長節」という名の姉妹歌があることも忘れることができません。この唄は、８８８６調歌詞を反覆して歌うのが特徴で、「長朝花」の「長」は、そこから付いたものです。

それから、この録音の１番の歌詞でも分かるように、「朝花」は「朝花はやり節」とも、「ちゅっきゃり朝花節」ともいわれます。今日、奄美大島、喜界島では、かなりアップテンポの「朝花」を、「ちゅっきゃり朝花」「別れ朝花」などといってよく歌っていますが、曲としてはこの方が昔風の「朝花」といえます。奄美大島南部の一部に残っていたものを近年掘り起こして復活させたものといえます。

歌唱者

榮田　久枝（さかえだ　ひさえ）　昭和３年生まれ。喜界町早町出身。

岩崎　恵一（いわさき　えいいち）昭和３年生まれ。喜界町上嘉鉄出身。

伊実久芭蕉山（いさねくばしゃやま）

唄：岡本　豊子
相方ハヤシ：菅沼　節枝
三味線：大岡　正太郎

詞章１

＊２番以降歌詞のみ

いさねくばしゃやまサなんて
（スラヨイヨイ）
あやてさじぬうとち　ヨオハレうとち
（アドッコイドッコイ）
うとち　ヨオハレうとち
（うとち　ヨオハレうとち）
うりばぴるたんちゅや
（スラヨイヨイ）
わんかなしにむどし　ヨオハレむどし
（ハアドッコイドッコイ）
むどし　ヨオハレむどし

共通語訳

伊実久（集落名）の芭蕉山に、きれいな手ぬぐいを落としてしまいました。それを拾った人は、私の愛しい人に戻してください。

※「芭蕉」はバナナも意味しますが、ふつう繊維をとる芭蕉をいいます。芭蕉山は島ではたいへんな財産でした。

※「かなし」は「かな」と同じで、恋人など、愛しい人のこと。

詞章２

すたのながみちなんて　きんのきせるばうとちゃんち
うりばぴるたんちゅや　わんかなしにむどし

共通語訳

すた（地名）の長い道に、金の煙管（キセル）を落としてしまいました。それを拾った人は、私の愛しい人に戻してください。

詞章３

わぬやくぬしまに　うやふぁろじうらんど
わぬばはなさしゅんちゅど　わうやぱろじ

共通語訳

私はこのシマ（集落）に、親や親戚はいません。私を可愛がってくれる人こそ、私の親、親戚です。

※「シマ」は島と集落の意味を持ちますが、ここでは集落がふさわしいようです。

曲目解説

喜界島の伊実久集落の芭蕉山を歌った唄です。芭蕉はバナナを指すことも

あるようですが、一般的には大きな葉が特徴的なバショウ科の多年草のことです。昔は芭蕉の幹から繊維を作り、それで芭蕉布を織っていましたので、芭蕉の山は大きな財産でした。

ところで、曲名は違っても同じ系統の唄が、奄美大島と徳之島にも伝わっています。奄美大島では「雨黒み」「あんちゃんな節」「伊津部立神節」など、徳之島では「雨ぐれ」などといわれる唄がそうです。これらの唄の特徴は、ちょうど伊実久の芭蕉山のように、土地の風物や出来事が歌われているということです。

例えば、「雨黒み」では、「西の方の管鈍〈集落名〉に、雨黒み〈暗い雨雲〉が掛かっているが、あれは雨雲ではない、私の愛しい人の涙だ」（共通語訳のみ）などと歌われます。

歌い方にも特色があって、「うとち　ヨオハレうとち」のように、言葉と言葉の間に「ヨオハレ」のようなハヤシコトバが入りますが、奄美大島、徳之島の唄でも「さがて　チョイチョイさがて」「かかて　ヨーヤレかかて」のような歌われ方がなされます。ささいなことかもしれませんが、ある唄がよその土地に移動するとき、節回しや歌詞は変化するのに、形式的なことは残っていくという一つの例といえます。

歌唱者

岡本　豊子（おかもと　とよこ）昭和１１年生まれ。喜界町志戸桶出身。

しゅみちながはま
塩道長浜

唄・三味線：亀島　季吉

詞章１

＊２番歌詞のみ

ハレー　しゅみちーながはまー
サーレーバヨーハレーナー
ヤレー　うまつなじーマタうかばヨーイ
エンヤサーヌドゥイドゥイー
（ナチカサヌドゥイドゥイー）
ハレーイ　いきゃだるさやーあてぃむー
サーレーバヨーハレーナー
ヤレー　うりとてマタぬるなヨーヤレ
エンヤサーヌドゥイドゥイー

共通語訳

塩道（集落名）の長浜に、馬がつないであったら、どんなに怠（だる）くても、それを取って乗ってはいけませんよ。

※（　　）は本来、別の人が歌うハヤシです。

詞章２

しゅみちながはま　わらびなきゅうり
うりやたがゆい　あしはだぬけさまつゆり

共通語訳

塩道長浜に、童（わらべ）の泣き声がしています。それは誰のせいで泣いているのですか。汗肌のケサマツ（女性名）のせいで泣いています。

※「わらびなき」は「子どもが泣く」という意味と、「子どものように大声で泣く」という意味にとられます。
※「汗肌」は女性の魅力を形容する言葉です。

曲目解説

曲名にある「塩道」は喜界島の一集落名ですが、この唄は、奄美大島でも人気曲の１つです。

この唄には、次のような伝説があります。かつて塩道集落に、ケサマツという美人の娘がいました。しかし、彼女は独り身で、誰かと結婚しようなどという気持ちが全くないようでした。ところが、そこにケサマツに恋い焦がれる一人の青年が現れました。その青年の名は盛里（もりさと）といわれています。

彼があまりにしつこく言い寄るので、ついにケサマツは、浜で会うことを約束してしまいます。ところが、ケサマツはけっして青年に心を許したのではありませんでした。彼女は、馬を連れて浜まで行きました。そこで、「この馬が逃げると困るので、手綱をあなたの足首に結わえてください」といいます。そしてそのあと、彼女は持って来た唐傘を馬の目の前でパッと広げるのです。馬は驚いて、青年を引きずったまま浜中を疾走します。哀れ青年は死に至るのですが、唄は彼の霊魂が夜な夜な浜で泣いているというものです。

悲しい唄でありながら、踊り唄「渡しゃ」の節と似ているところがあるという人がおり、この唄はもともと仕事唄ではなかったかという説もあります。

歌唱者

亀島　季吉（かめしま　すいきち）大正元年生まれ。喜界町嘉鈍出身。

渡(わた)しゃ

唄・相方ハヤシ・太鼓：久倉　ユキ
唄・相方ハヤシ：嶺山　ソノ子
三味線：森元　隆信

詞章１

＊２番歌詞のみ

わたしゃぶねイすぶね
ハレ　ひとのらぬハレみぶね
ハレ　ひとのらぬハレみぶね
(ハレ　ひとのらぬハレみぶね)
かながちゅりのせて
ヤレ　いかすマタハレしぬぎ
ハレ　かなちゅりのせて
いかすしぬぎ
(クルカネヒヤシヤ　ムデキリトーム
ハナサントゥジトゥヌ　ウメキリナユンニャ
ハレウメキリナユンニャトートーイ)

共通語訳

渡し舟や、素舟、御船には普通の人は乗りません。かな（愛しい人）を１人乗せて、行かせるのが心配です。

※上の句部分は、ふだん、渡し舟には庶民は乗らず、侍や良家の人が乗ったことをいっているのかもしれません。

詞章２

うみぬしらなみや　うちかえしかえし
むかしとのさまの　みすでかさべ

共通語訳

海の白波は、打ち返しまた返します。そのように、昔の殿さまは御袖を重ねて着たものです。

曲目解説

昔、奄美大島の笠利と、喜界島の間に渡しゃ（渡し船）が通っていましたが、この唄はそれを歌ったものだといわれています。喜界島でも、奄美大島でも手踊り唄として歌われますが、かつては舟を漕ぐときの様子をおもしろおかしく真似て踊られました。

この唄は、最初から踊り唄としてあったのではなく、仕事唄がもとの唄だと思われます。奄美では、仕事唄はほとんど「イト」とか、「イェト」といわれますが、これは掛け声のことです。仕事唄の中でも、盛んに歌われたのは舟漕ぎ唄でしたから、渡し舟の船頭さんが舟漕ぎ唄を歌ったのは当たり前のことです。

なお、古くは、おそらく掛け声だけが歌われ、やがてそれでは物足りなくなって、その時々の思いや、世間のうわさを歌うようになったと考えられます。

「渡しゃ」には、面白いハヤシコトバが付くのも１つの特徴です。

アカネバッタヌ　ティヒンギャチ　ウリヤウユンチ　キモグルシャ（赤羽のバッタを、逃がしてしまったが、それを追おうとして、気を病ます）

一例ですが、理屈抜きにおもしろければ、それでよかったのです。

歌唱者

久倉　ユキ（ひさくら　ゆき）昭和７年生まれ。喜界町佐手久出身。

嶺山　ソノ子（みねやま　そのこ）大正１５年生まれ。喜界島佐手久出身。